

柳橋 克哉

* あらすじ

桐生真一（25）は東京で、ダイビングのインストラクターをしている。

ある日、お世話になった村田正治（53）から電話がかかってくる。

父親の桐生英一郎（53）が倒れたので北海道に見舞いに帰って来てほしいという。

父親を恨んでいる真一は、帰ることを拒むが、正治に頼まれ、渋々帰ることにする。

見舞いに行くと、英一郎は、真一にあるものを捜して欲しいと言いつつ出さず。

それは、アイヌ民話に出てくるアイヌソッキだという。

馬鹿馬鹿しいと思う真一。だが、正治は最近、海で新種の魚が出たという噂があり、そのことを言っているのではないかと言う。

流水の下に潜り、新種の魚を捜す真一。

父親は、昔、海で事故に遭い、アイヌソッキに助けられたという。

だが、その時、英一郎はアイヌソッキを刺してしまったのだという。

アイヌソッキを捜す真一は、事故で氷の下に閉じ込められてしまう。

意識が薄れる中、真一を助けたのはアイヌソッキだった。

そのことを父親に話す、真一。

英一郎に、アイヌソッキはもう恨んでいないのではないかと告げる。

涙を流し、「ありがとう」とつぶやいた英

一郎は、穏やかに息を引き取る。
父親の葬儀。

真一は棺にアイヌソッキの髪を入れる。
そして、快晴の空を見て思う。

今もこの空のように青い海の中で、アイヌソッキは自由に泳いでいるのだろうか。

* 人物表

桐生真一（25） インストラクター

桐生英一郎（53） 真一の父親

村田正治（53） 英一郎の親友

金村恭子（23） インストラクター

その他

水中。

真一の泳ぐ音。呼吸をするたびに、空気の泡がブクブクと昇っていく。

真一(N) 「氷の下の世界。氷を通して差し込む光は、まるでオーロラのように輝いている」

泳いでいた真一が止まる。

真一 「流星……？」

真一(N) 「クリオネだった。氷の妖精が光を放ちながら群れをなしていた」

再び泳ぎだす真一。

真一(N) 「知床、ウトロ。水深五メートル。真冬の海の中は、幻想的な世界だ。以前に潜った時もこうして見惚れていた事を思い出す。でも、今はこうして浸っている場合じゃない。……それにしても、やっかいな探し物を頼まれたものだ」

メインタイトル『氷の下で』

携帯電話の着信音。

真一、通話ボタンを押す。

真一 「もしもし」

正治 「真一君」

真一 「あ、正治さん？ お久しぶりです」

正治 「すぐに、こっちに帰って来て欲しい」

真一 「え？」

正治 「……お父さんが倒れたんだ」

真一 「……そうですか」

正治 「見舞いに来てやってくれないかな？」

真一 「すいません。仕事が忙しいんで」

正治 「もう、そんなに長くないんだよ」

真一 「……」

正治 「まだ、恨んでいるの？」

真一 「当たり前です。あいつのせいで、母さん……」

正治 「気持ちは解かるよ」

真一 「それなら……」

正治 「あいつの最後の願いなんだ。頼むよ」

真一 「……」

病院内。

館内放送や、看護師、患者たちの話声。

その中を歩く、真一。

真一(N) 「正直言えば、少しは動揺した。

それでも、見舞いに来る気はなかった。

だけど正治さんの頼み事を断ることはできなかった。正治さんは、俺の恩人だから」

真一(N) 「正直言えば、少しは動揺した。それでも、見舞いに来る気はなかった。だけど正治さんの頼み事を断ることはできなかった。正治さんは、俺の恩人だから」

真一、立ち止まり、ドアを開く。

正治 「おお、真一君、来てくれたか」

真一 「はい」

真一(N) 「病室に行くと、正治さんが見舞いに来ていた。親父に視線を向ける。げっそりとやせ細った姿。もう長くはないというのには確かなようだ」

英一郎 「真一、久しぶりだな。元気だったか？」

真一 「ああ。まあ」

英一郎 「よく、来てくれたな」

真一 「別に、親父のためじゃない」

英一郎 「……まあ、いい。お前に頼みたい事があるんだ」

真一 「ちょっと待てよ。俺は、ただ見舞いに」

英一郎 「流水ダイビング。ほら、前に連れて行ってやったことあったろ」

真一 「……いつの話だよ」

英一郎 「捜して欲しいものがある」

真一 「(呆れて) 探す？ 何を」

英一郎 「アイヌソッキ」

真一 「アイヌ……ソッキ？」

英一郎 「アイヌに伝わる人魚だ」

真一 「人魚？ そんなのいるわけないだろ。馬鹿馬鹿しい」

病院内。

館内放送や、患者たちの話し声、足音。

病院内。

館内放送や、患者たちの話し声、足音。

真一「親父のやつ、馬鹿にしやがって」

正治「……真一君、頼むよ」

真一「正治さんまでそんな事言うんですか？」

正治「最近、ウトロで新種の魚が目撃されているらしいんだ。それを見つけてきて欲しい。それで、あいつは納得してくれると思うから」

真一「……」

水の中。

真一の呼吸音。

真一(N)「クリオネたちが織り成す、水の流星群。その脇を泳ぐ」

真一の泳ぐ音。

真一(N)「体に括りつけたロープを辿り、水上へと向かう。このロープは、出口までの道しるべだ」

水の中から上がる真一と、インストラクターの金村恭子(23)。

真一(N)「水から上がると、体から湯気が立ち上がる。水の中よりも、外気温の方が低いからだ」

恭子「どうでした？」

真一「最高ですね」

恭子「良かった。そう言って貰えるのって、なかなか無いんですね」

真一「そうなんですか？ 凄く綺麗なのに」

恭子「(笑って)お客さん自体、あんまりいないですよ。冬は潜れないって思っている人が多いみたいで」

真一「なるほど……」

恭子「だから、いつも来る人って、常連の人ばかり」

恭子が機材を片付け始める。

真一「あ、手伝いますよ。機材を、スノーモ」

ービルに積みばいいんですね？」

恭子「いや、そんな……」

真一「気にしないで下さい。二人でやった方が早いですしね」

恭子「……ありがとうございます」

一緒に片付け始める、真一と恭子。

恭子「あの……、ずいぶんと慣れてたみたいですね」

真一「ああ。俺、結構潜っているですよ、沖繩とかでも、数回」

恭子「へえ。じゃあ、今回も観光でこっちは？」

真一「いえ。元々、実家が北海道なんです

よ」

恭子「里帰りですか」

真一「はい。そんなところです」

恭子「何を捜していたんですか？」

真一「え？」

恭子「見回すのに、ロープを邪魔そうにしていたから……」

真一「……あ、いや」

恭子「あ、もしかして、最近、噂になっている新種の魚を捜しているんですか？」

真一「あの……、アイヌソッキって知っていますか？」

恭子「……もしかして、英一郎さんの息子さんですか？」

真一「ど、どうして、知ってるんですか」

恭子「やっぱり！ どこかで、見たことあるような顔だと思ったんですね」

真一「……親父って、よく来てたんですか？」

恭子「前まで、毎日のように来てましたよ」

真一「……」

恭子「でも、最近、どうしたんですかね？ 全然、来ないですけど……」

真一「あー、いや。何か、忙しいみたいで」

恭子「それで、親父はアイヌソッキを？」

真一「あ、い。ずっと捜していたみたいです。それこそ、朝から夜まで」

真一「そんなの、見つかるわけじゃないですよ

恭子「やっぱり人魚って、男の人の憧れなんですかね？」

真一「……どうなんですかね。親父と違って、俺は全く興味ないですけど」

恭子「そうなんですか？」

真一「まあ、親父は憧れというより、ただ研究したいだけだと思います」

恭子「……研究ですか。じゃ、不老不死の方に興味があるんですかね？」

真一「……不老不死？」

恭子「人魚の肉には特別な力があるらしいんですよ」

真一「……へえ」

真一（N）「物心ついた時には、すでに親父はアイヌの研究に没頭していた。ほとんど、家にいなかった。そんな親父に対して、母さんは何も言わなかった。母さんは、金を家に入れない親父の代わりに必死に働いて、俺を大学まで行かせてくれた。それどころか、親父に送りまでしてたみたいだ。そんな母さんが倒れたのは、五年前。その一年後に母さんは息を引き取った。通夜の時、ふらりと帰ってきた親父。母さんの遺影の前で、泣いて謝っていた。それなのに、親父は研究を続けている」

病院内。

やや早足で歩く真一。

真一（N）「親父が研究を続けている理由。もし、それが不老不死のためだったとしたら……。俺は、親父を許さない」

勢い良くドアを開ける真一。

正治「あ、真一君」

英一郎「どうだ？ アイヌソッキは見つかったか？」

真一「……親父、答えろ」

英一郎「ん？」

真一「なんで、アイヌソッキを捜してる？」

英一郎「……研究のためだ」

真一「本当に、それだけか？」

英一郎「どういふことだ？」

真一「アイヌソッキには、不老不死の力があるんだろ？ それが目当てなんじゃないのか？」

英一郎「……」

真一「答えろよ」

英一郎「……そうだ、と言ったらどうする？」

真一「ふざけるなよっ！」

正治「真一君……」

真一「正治さんは黙って下さい」

英一郎「……」

真一「親父。あんたは研究ばかりで、家の事は何もしなかった。その分、母さんが

一人で頑張ってたんだ。……それで、無理がたたって倒れた」

英一郎「……」

真一「親父。あんたは研究ばかりで、家の事は何もしなかった。その分、母さんが一人で頑張ってたんだ。……それで、無理がたたって倒れた」

英一郎「……」

真一「あんたが、母さんを殺したんだ！」

英一郎「……」

真一「あんたが、母さんを殺したんだ！」

正治「……真一君」

真一「それなのに、自分だけは助かりたいのか？ 不老不死なんて、夢みたいな事を手に入れたいのかよ。そんなの、自分勝手すぎるだろ」

正治「真一君、止めるんだ」

真一「母さんは、親父をずっと支えてきた。それなのに、あんたは、ずっと母さんを裏切り続けたんだ」

英一郎「……そう、だな」

真一（N）「親父のその表情は、初めて見るものだった。込み上げる痛みと悲しみを必死に堪えているような顔。唇を噛み、視線を落とした」

真一「とにかく、俺はもう、アイヌソッキを捜すのは止めるからな」

ドアを開け、歩き出す真一。

英一郎「……真一」

真一「(立ち止まり)……何だよ?」

英一郎「俺は昔、体が弱かったんだ」

真一「……?」

英一郎「中学の頃まで、ずっと入退院を繰り返してた」

真一「……」

英一郎「いつも病院の窓から学校に通う同級生を眺めてたよ」

真一「……何が言いたいんだよ」

英一郎「大学の時のサークルのちよつとした旅行だった。乗っていた船が転覆したんだ」

真一「え?」

英一郎「……その時、俺だけが生き残った」

真一「……」

英一郎「激流に吞まれる直前だった。俺は何かに引っぱられた」

真一「……」

英一郎「アイヌソツキだった」

真一「まさか、そんなこと……」

英一郎「その時のことは、今でもはっきり覚えてる」

真一「……」

英一郎「助けられているとき、俺は必死にもがいた。殺されると思った。それで、俺は……船の残骸を握り、人魚を刺したんだ」

真一「……」

英一郎「腰のところを二度ほどな。刺したんだよ。それでも、人魚は安全な場所まで連れて行ってくれた。そして、別れるとき……」

真一「……?」

英一郎「寂しそうに笑ったんだ」

真一「……」

英一郎「あの顔は、いまでも忘れられない」

真一「……」

病院内。

院内放送。患者や看護師たちの足音や話声。

真一「親父の話、どう思います?」

正治「私にも、わからない。本当の事なのか、死にそうな時に見た幻想なのか」

真一「……俺には、信じられません」

正治「あいつは、友達がいなかったんだ。入退院を繰り返している間、ずっとね」

真一「……」

正治「あいつは孤独というのが、どんなに寂しくて、辛いかというのを知ってるんだ」

真一「……初めて聞きましたよ。あんな話」

正治「高校にあがる頃には大分良くなっていた。あいつは、今までの時間を埋めるように、色々なことをしてたよ。部活や旅行。なによりも、友達を大事にする奴だった」

真一「……」

正治「そして、あの事故だ。……それで、あいつは、また孤独になった」

真一「……でも」

正治「ああ。俺や、君の母さんがいたんだけどね。あいつの心を癒す事はできなかったよ。それほど、あの事故のことが衝撃的だったみたいだ」

真一「助けられたのに、その人魚を刺した……」

正治「あいつは言ってたよ。あれは、孤独を感じている眼だって。英一郎は、きつと、その人魚と昔の自分を重ねたんだと思っ」

真一「もし、それが本当の事だとしたら、どうして、親父だけを助けたんだろう」

正治「……」

水中。

真一が呼吸するたびに、空気の泡がブクブクと昇っていく。

真一(N)「結局、俺はもう一度潜る事にした」

真一の泳ぐ音。

真一(N)「雲が太陽を隠しているのだから。オーロラのような光の虹が差し込んでこない。海の中が薄暗く感じる」

泳ぎ続ける真一。

真一 (N) 「あれほど群れをなしていたクリオネが一匹もいなかった。小魚どころか、生き物の気配が感じられない」

真一の呼吸音。

真一「ん？」

わずかに、真一の呼吸音が乱れる。

真一 (N) 「一瞬、何かが目端に写った。巨大な尾ひれ。だが、それはすぐに岩陰に隠れてしまった」

泳ぐ真一。だが、すぐに止まる。

真一 (N) 「その岩は、すぐそこだった。だけど、もう少しのところまで届かない。体に付けてあるロープのせいだった」

真一の呼吸音。

真一 (N) 「ほんの少しだ。少しの時間だけ。……俺はロープを外した」

真一、泳ぎ始める。そして、止まる。

真一 (N) 「そこに現れたのは、見たこと

無い、大きな魚だった。大きいと言っても四十センチほど。人魚と言うにはあまりにも小さすぎる。やつぱり、あの話は、親父が見た幻想だったんだ」

真一、泳ぐ。

真一の慌てるような呼吸音。

真一 (N) 「ロープがない。そんなバカな。ほんの数秒なのに。いくら、見渡してもロープが見当たらない」

真一、がむしやらに泳ぐ。

真一 (N) 「落ち着け！ とにかく上に上がろう」

必死に泳ぐ真一。呼吸音が激しい。そして、氷を叩く音。

真一「くそっ」

真一 (N) 「そこには氷の壁が広がっていた。出れない。とにかく、穴を捜さない。俺は出口を捜して、必死に泳いだ」

弱々しい呼吸音。

真一 (N) 「どれくらい時間がたったんだろうか。ボンベの酸素も少なくなってきた

のか、息苦しい。体も冷たくなって、ほとんど動かない。静寂。視界も霞んできた。……初めて、死を意識した。親父も、事故に遭ったとき、こんなふう思ったんだろうか」

誰かが泳いで、近づいてくるような音。

真一 (N) 「何かに、体を掴まれた。そして、引っぱられる」

何かが泳ぐような音。

真一 (N) 「何とか、目を開ける。そこには……人魚がいた。全身が鱗に覆われている。尖った爪と牙。全てを覆いつくすような、黒く長い髪」

真一「アイヌソッキ……？」

真一の呼吸音。

真一 (N) 「不思議と怖くは無かった。髪の間から見える瞳に優しさを感じたからかもしれない」

アイヌソッキが水を掻き分け、泳ぐ。

真一 (N) 「腰の所には、傷が二つある」

真一の呼吸音。

真一(N)「見間違いかもしれない。そんな感情は持っていないのかもしれない。でも、……確かに笑っているように見えただ」

真一「……親父がさ、助けてくれてありがとうって……」

アイヌソツキの泳ぐ音と、真一の呼吸音が遠ざかっていく。

やがて、恭子が真一の頬を叩く。

恭子「桐生さん、桐生さん！」

真一「う、……ん」

恭子「良かった、気がついた」

真一「あれ？ここは……」

真一(N)「そこは外の世界だった。氷の上に戻っていた」

恭子「もう、心配しましたよ。全然上がって来ないんですから」

真一「……君が助けてくれたの？」

恭子「そうですよ。水中で気絶してるですもん。ビックリしましたよ」

真一「(大きいため息)……夢だったのか」

恭子「はい？」

真一「あ、いや。何でも……」

恭子「そんなことより、どうしてロープを外したんですか！」

真一「え？」

恭子「ロープは命綱みたいなものなんですよ。(強い口調で)解かてるはずですよね」

真一「え？あ……」

恭子「出口の近くにいたから良かったですけど、下手したら死んでたんですよ。ちょっと、聞いているんですか！」

真一「……」

恭子「……それ、何ですか？」

真一「え？」

真一(N)「手に何か絡み付いていた。……それは、長い髪だった」

病院内。

真一が廊下を走っている。

正治「真一君！」

真一「(立ち止まり)親父は？」

正治「今、集中治療室で、先生たちが処置してる」

真一「……」

真一(N)「病院に戻ると親父の容態が急変していた。医師の話では、今夜が山だそうだ」

正治「真一君、帰って少し休んだ方がいい」

真一「いえ、大丈夫です」

真一(N)「アイヌソツキのことを親父に話そうか、迷っていた」

ドアが開く。

医師「何とか、持ち直しました。……ですが、また、いつこうなってもおかしくありません」

真一「……親父」

英一郎「……真一か。どうだった？」

真一「俺さ、潜ってる時、ロープが外れちゃって、出口が解からなくなっちゃって、死になっちゃったんだ」

英一郎「……えっ？」

真一「俺、もう死ぬなって思った時だった。人魚に助けられたんだ」

英一郎「……!!」

真一「優しそうな目だった」

英一郎「……ああ。俺はあの時、それに気づけなかった」

真一「……親父のこと、謝っておいたよ。そしたら、笑ってくれた」

英一郎「……」

真一「親父」

英一郎「……なんだ？」

真一「アイヌソツキは、俺が親父の息子だと」

気づいたと思う。顔、そっくりだからな」

英一郎「……」

真一「それでも、助けてくれた。きつとアイヌソツキは親父のこと、恨んでないよ」

英一郎「……そうか」

真一「……」

英一郎「母さんや、お前には、悪い事をしたな。苦労ばかりかけた」

真一「(笑って)何を今更」

英一郎「……そうだな」

真一(N)「親父の微かな笑み。こんな穏やかな表情は初めて見た」

英一郎「あっちに行ったら、母さんに謝らないな」とな

真一「そうそう。うんと尽くしてあげなよ」

英一郎「俺は、何をしてたんだろうな。大切な人たちが、近くにいたのに……」

真一(N)「親父の目から涙が溢れ出した」

英一郎「……。ありがとう」

真一(N)「それが、何の『ありがとう』かは、解からなかった。もしかしたら、作り話と思われたかもしれない。それでも、親父には伝えたかったんだ」

真一「……」

真一(N)「親父は、穏やかな顔をして息を引き取った」

葬儀場。

司会者「それでは、故人との最後のお別れになります」

真一と正治が、棺に歩み寄る。

正治「……英一郎、幸せそうな顔だな」

真一「……ええ」

真一(N)「俺はポケットから、アイヌソツキの髪を出して、親父の手に握らせた」

正治「なんだい？ それ」

真一「アイヌソツキの髪です」

正治「……そうか」

真一「アイヌソツキは……」

正治「ん？」

真一「どうして、親父を助けたんだろう？」

正治「英一郎の研究書を整理したら、出てきたんだけど」

真一「はい」

正治「英一郎の祖父は、アイヌ人だったみたいだ」

真一「そうだったんですか。だから……」

真一、正治が歩き出す。

正治「ひと段落したら、また東京に戻るのかい？」

真一「……はい」

正治「そうか……。寂しくなるな」

真一「また帰ってきます」

正治「楽しみに、待っているよ」

真一、大きく深呼吸をする。

真一「いい天気ですね」

真一(N)「澄んだ青い空。この空のように青い海で、アイヌソツキは今日も自由に泳ぎまわっているのだろうか」

(了)